

平成17年度第2回東シナ海長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2006年4月～9月)

海況

- (1) 九州南方海域の黒潮は、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量予測)

- (1) マアジ：前年を下回る。
- (2) マサバ：前年並み。
- (3) ゴマサバ：前年並み。
- (4) マイワシ：前年並みで低調。
- (5) ウルメイワシ：前年並みで平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：前年・平年並み。

問い合わせ先

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び、西海区水産研究所のホームページ(<http://www.snf.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は以下のとおりです。

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

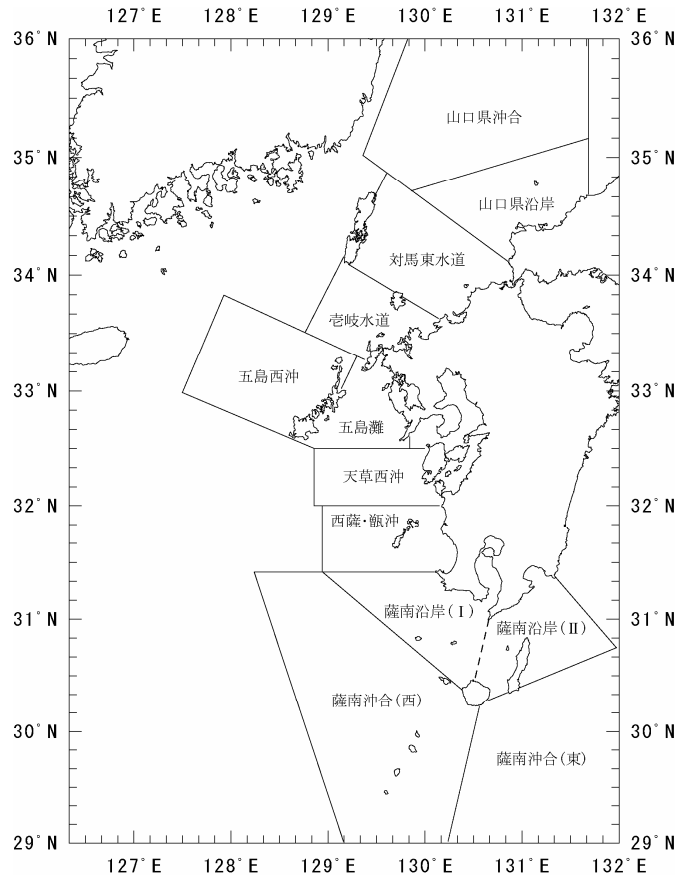
電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 企画連絡室

〒851-2213 長崎市多良良町1551-8

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767、電子メール：snf-kiren@ml.affrc.go.jp

予報対象海域



参画機関

山口県水産研究センター

福岡県水産海洋技術センター

佐賀県玄海水産振興センター

長崎県総合水産試験場

熊本県水産研究センター

鹿児島県水産技術開発センター

沖縄県水産試験場

社団法人 漁業情報サービスセンター

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

独立行政法人 水産総合研究センター

西海区水産研究所

平成17年度第2回東シナ海長期海況予報

1. 今後の見通し(2006年4月～9月)

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、5月には「接岸傾向」、6～7月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、前半、後半ともに「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過(2005年10月～2006年3月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部:10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12月「平年並み」、1月「かなり低め」、2月「平年並み」。

南部:10月「かなり高め」、11月「やや高め」、12～2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季、冬季ともに「平年並み」。流量は、秋季は「かなり多め」、冬季は「少なめ」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、11月と2月には「接岸傾向」となったが、他の月は概ね「屋久島南付近での変動」で経過。

(2) 海面水温

10・11月「かなり高め」、12・1月「平年並み」、2月「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合:10・11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

山口県沿岸:10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」、1月「はなはだ低め」、3月「やや低め」。

対馬東水道:10月「かなり高め」、11月「やや高め」、1月「かなり低め」、2・3月「平年並み」。

壱岐水道、五島西沖:11月「やや高め」、2月「平年並み」。

五島灘:11・2月「やや高め」。

天草西沖:11月「やや高め」、3月「やや低め」。

西薩・甌沖:11月「やや高め」、3月「平年並み」。

薩南沿岸:11月「やや高め」、3月「やや低め」。

薩南沖合:11月「かなり高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南東:10月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合:10・11・1月「平年並み」、3月「やや低め」。

山口県沿岸:10・11・1・3月「平年並み」。

対馬東水道:10・11月と1・2月「平年並み」、3月「やや低め」。

壱岐水道、五島西沖、五島灘:11・2月「平年並み」。

天草西沖、西薩・甕沖:11月「平年並み」、3月「かなり低め」。

薩南沿岸:11・3月「やや低め」。

薩南沖合:11月「平年並み」、3月「かなり低め」。

3. 現況(2006年3月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部・南部とも「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2006年4月～9月)

対象海域: 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業: まき網、定置網、その他

対象魚群: 0歳魚(2006年級群(2006年生まれ))、1歳魚(2005年級群)、2歳魚(2004年級群)。

魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量: 前年を下回る。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

(3) 魚体: 15～25cmの1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が主に、5～15cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と25cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量: 前年並み。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで平年を上回る。

(3) 魚体: 25～30cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～25cmの0歳魚(豆銘柄)と30cm以上の2歳魚(中銘柄)以上も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量: 前年並み。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年を上回る。

(3) 魚体: 25～30cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～28cmの0歳魚(豆銘柄)と30cm以上の2歳魚(中銘柄)以上も漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量: 前年並みで低調。

(2) 漁期・漁場: 沿岸域で散発的に漁獲される。

(3) 魚体: 15～18cm程度の1歳魚(中羽銘柄)が主に、18～20cmの2・3歳魚(大羽銘柄)が混じる。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量: 前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場: 漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体: 漁期前半は18cm以上の1・2歳魚(大羽銘柄)が、漁期後半は5～15cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量: 前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場: 主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体: 4月は10cm以上の1歳魚(大羽銘柄)に3～6cmの0歳魚(シラス・カエリ銘柄)が混じり、5月以降は5～10cmの0歳魚(カエリ～中羽銘柄)が主に漁獲される。

注: 「前年」は2005年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。「沖合域」は大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2005年10月～2006年1月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には高水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2004年の資源量も増加した。東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年に9～14万トンであったがその後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13～16万トンに減少した。2003年から、漁獲量は再び増加し、2003年は18万トン、2004年には19万トンの漁獲量であった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年以降減少し、1999～2004年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2003年は83千トン、2004年は85千トンと低い水準にある。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っている。東シナ海・日本海における我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、やや低い33～63千トンの漁獲が続いており、2004年は33千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後急激に減少した。2001～2003年には漁獲量は1千トン程度で推移している。1999年には0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し近年は極めて低位にある。海域によっては水揚げ量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は低水準である。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002年の加入量が以前よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003～2004年の加入量は2001～2002年の加入量よりも少ないとみられる。2005年級群は各県地先の漁獲状況および各種調査結果からみると、2004年級群よりも少ない。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995～1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏

季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001年秋季から2003年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。2003年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。2005年1月以降に大羽イワシを主体に漁況が上向き、2005年春季発生群の加入はやや良かった。

2. 漁況の経過

2005年10月～2006年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖および東シナ海中部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計8万2千トンで前年(2004年10月～2005年1月、9万6千トン)並みであった。マアジは9千トンと前年(1万8千トン)を下回り、さば類は6万トンで前年(6万7千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は、15cm以下の0歳魚(2005年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様)と15～20cmの1歳魚であった。マサバは、海域により差があるが、全体的には前年・平年を上回った。漁獲の主体は25～28cmの0歳魚と29～32cmの1歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を大幅に上回った。体長25～32cmの0・1歳魚が主に漁獲された。マイワシは、全体として漁獲量が少なかったものの、山口県では前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は15cm程度の0歳魚であった。ウルメイワシは、鹿児島県で前年・平年を下回ったが、その他では前年を上回って推移した。全体として、前年・平年を下回った。10～12月は15～18cmの0歳魚主体で、1月以降に20cm以上の1・2歳魚が主体となった。カタクチイワシは、山口県～佐賀県では前年を下回ったが、長崎県～鹿児島県では前年並みか上回った。全体としては前年並みで、平年を上回った。10～12月のシラス・カエリ・小羽(6cm以下の0歳魚:秋季発生群)は不漁であった前年を上回った。1月以降に大羽(10cm以上の1歳魚)主体に経過した。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2004年級群の豊度は2003年級群よりやや低く、2005年級群は2004年級群より豊度が低いと考えられる。2006年級群について、親魚量の水準は近年では比較的高く、2006年2～3月に行った調査では、過去4年間と同様に東シナ海南部海域に濃密な仔魚の分布がみられた。今後の海況によって加入量が大きく変化する可能性も高いが、2005年と同程度の加入量と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2006年級群)は前年(の0歳魚、以下同様)と同程度、1歳魚(2005年級群)と2歳魚(2004年級群)は前年より少ないと見積もられる。これらから、全体の来遊量も前年を下回ると考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日当り漁獲量)は、近年、比較的高い値で安定している(参考図参照)。沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、近年、比較的高い水準で安定していたが、前年は減少した。沖合の漁況は、来遊量の減少を反映して、前年を下回り、沿岸域の漁況は、低調だった前年並みで平年を下回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2004年級群の豊度は2003年級群より高く、2005年級群の豊度は2004年級群と同程度と考えられる。2006年級群の豊

度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は漸増傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)が、2006年は2005年よりやや低いので(水温が低いと初期生残に有利)、2005年級群と同程度かやや多いと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2006年級群)は前年並みかそれより多く、1歳魚(2005年級群)は前年並み、2歳魚(2004年級群)は前年より多いと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量も前年並みと考えられる。

近年、沖合域・沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域では前年並みで平年を上回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2004年級群の豊度は2003年級群より高く、2005年級群は2004年級群と同程度の高い豊度と考えられる。2006年級群の豊度を予測するのは困難であるが、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)が、2006年は2005年よりやや低いので(水温が低いと初期生残に不利)、2005年級群より少ないと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2006年級群)は前年より少なく、1歳魚(2005年級群)は前年並み、2歳魚(2004年級群)は前年より多いと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域、沿岸域(鹿児島県)の指標はかなり変動している。沖合域の漁況は、好調であった前年並みで推移すると考えられる。沿岸域の漁況は、4～5月は、好調に推移している1～2月と同一群が漁獲対象となるので、1・2歳魚主体で前年・平年を上回り、6月以降は1歳魚主体で前年より低調に推移し、期間全体としては好調であった前年を下回るものの、平年を上回ると考えられる。

(4) マイワシ

2001年に対馬暖流域における産卵調査の結果が過去最悪となって以降、沿岸域でのマイワシの漁獲量は極端に少なくなった。2002年に沿岸域での漁獲量は底打ちとなり、2003年および2004年は前年を上回る漁獲量で推移しているものの、2000年以前に比べてその漁獲量は少ない。2005年級群も大きな加入とはなっていない。

(5) ウルメイワシ

2001年および2002年には0歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後はやや漸減傾向にある。2005年の夏季に行った計量魚群探知機調査でも分布量は前年を下回っているため、2005年級群は大きくない。4月以降は産卵親魚と0歳魚が漁獲の主体となる。産卵親魚の来遊量は低いと見積もられるので、0歳魚の加入水準も高くないと判断される。

(6) カタクチイワシ

2003年秋季以降には、来遊資源量がやや上向いていると判断される。2005年初夏季に行われた新規加入量調査は前年を下回ったものの、2005年夏季に行われた計量魚群探知機調査では前年を上回った。2005年秋季漁は不漁であった前年を上回ったものの平年並みであった。2006年1月以降に前年と同様、大羽(産卵親魚)の来遊量が多く、4月以降の0歳魚の加入が期待できる。

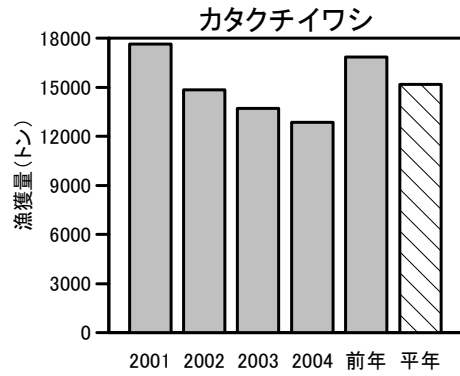
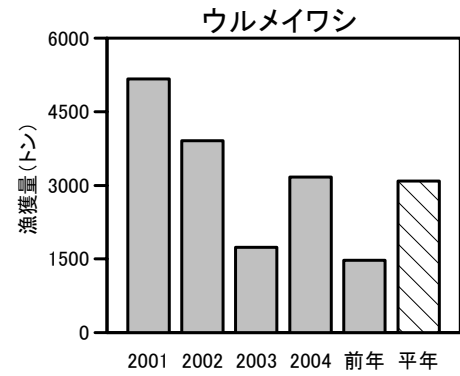
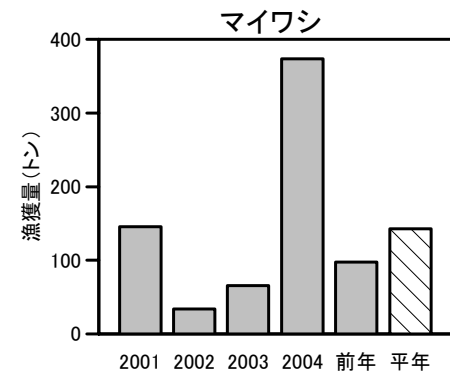
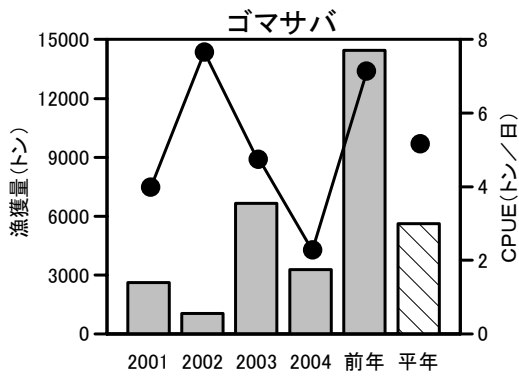
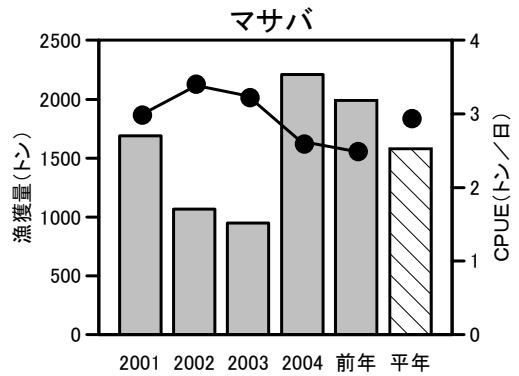
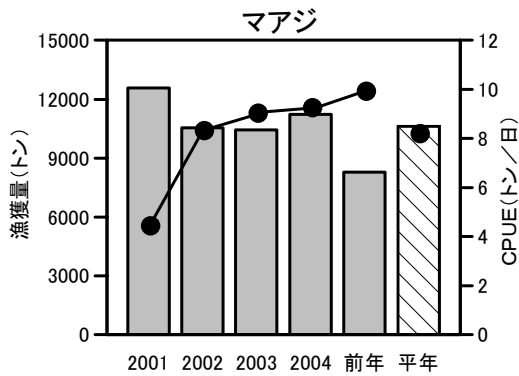
表 1. 沿岸域の漁況経過 (2005 年 11 月～2006 年 1 月、一部 2005 年 10 月、2006 年 2 月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網で 401 トンの水揚げがあった。これは前年比 53%、平年比 70%で前年・平年を下回った。湊支店の棒受網では、ゼンゴが 10～12 月にかけて 0.62 トン水揚げされたのみで、前年比 32%、平年比 11%と低調に終わった。	中型まき網で 586 トンの水揚げがあった。これは前年比 534%、平年比 151%で前年・平年を上回った。湊支店の棒受網では、6 トンが水揚げされ、全く水揚げされなかった昨年を上回った。	
福岡	代表港まき網漁獲量は 238 トンで前年の 40%、平年の 64%と不漁。小、ゼンゴ、マメ銘柄が平年に比べ少なかった。棒受網は 138 トンで平年の 149%とやや好漁であった。銘柄は大中と小が主体であった。	代表港まき網の漁獲量は 275 トン、平年の 73%とやや不漁。銘柄はギリが中心。棒受網では漁獲量はわずか 1 トン。マメ銘柄の漁獲が全くなかった。	代表港まき網の漁獲量は 267 トンで平年の 328%と好漁であった。
佐賀	前年を下回り、平年並みであった。(前年比 53%、平年比 85%)	前年・平年を大きく下回った。(前年比 4.3%、平年比 7.5%)	
長崎	地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった。(前年比 70%、平年比 84%)	地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を上回った。(前年比 98%、平年比 127%)	
熊本 牛深港	68 トンの水揚げがあり、前年比 46%、平年比 39%で、前年・平年を大幅に下回った。	304 トンの水揚げがあり、前年比 184%、平年比 138%で、前年・平年を上回った。	
鹿児島	10～2 月は豆・小アジ(2005 年級群)及び小・中アジ(2004 年級群)主体に前年・平年並みで推移した。 期間中合計で 1,268 トンの水揚げで、前年比 92%、平年比 82%。		10～12 月は豆・小(2005 年級群・2004 年級群)主体、1～2 月は小・中(2005 年級群・2004 年級群・2003 年級群)主体に前年・平年を上回り好調に推移した。 期間中合計で 11,709 トンの水揚げで、前年比 332%、平年比 368%。

表 1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網での水揚げはなかった。湊支店では 10 月を中心に棒受網でヒラゴが 36 トン水揚げされたが、他の銘柄はほとんど水揚げされなかった。水揚量は、前年比 106%、平年比 280%と、前年並みで、平年を上回った。	湊支店の棒受網は 10 月に大羽のみ 378 トンを水揚げしていた。水揚量は前年比 220%、平年比 125%と前年・平年を上回った。	湊支店の棒受網の水揚量はカタクチイワシ 182 トン中、シラス 140 トン（77%）であった。11 月のシラス水揚量が豊漁であった昨年の 1/5 となり、全銘柄の水揚量は前年比 49%、平年比 65%と前年・平年を下回った。
福岡	代表港まき網の漁獲量は 1 トン未満であり、棒受網では全く漁獲されなかった。	代表港まき網の漁獲量は 28 トンで、前年の 523%、平年の 953%と好漁であった。一方、棒受網では全く漁獲されなかった	代表港まき網ではまとまった魚群が無かったため操業しなかった。棒受網の漁獲量は、16 トンで前年の 82%、平年の 28%とやはり不漁であった。
佐賀	前年・平年を上回った。(前年比 127%、平年比 635%)	水揚げなし。	前年を下回り、平年並みであった。(前年比 58%、平年比 109%)
長崎	前年同様、漁獲は低調に推移した。	前年を上回り、平年を下回った。(前年比 127%、平年比 38%)	地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を上回った。(前年比 102%、平年比 197%)
熊本 牛深港	1.4 トンの水揚げがあり、前年比 642%、平年比 93%で、前年を上回り、平年並みであった。	166 トンの水揚げがあり、前年比 461%、平年比 72%で、前年を上回り、平年を下回った。	1,503 トンの水揚げがあり、前年比 604%、平年比 395%で、前年・平年を上回った。
鹿児島	まき網で 3.1 トンの水揚げ（前年 0.1 トン、平年 0.9 トン）で、まとまった漁獲はなかった。	県 4 港のまき網では 121.6 トンの水揚げで、前年比 26%、平年比 30%、北薩海域の棒受網では 28.1 トンの水揚げで、前年比 118%、平年比 81%であった。薩南海域の水揚げが極めて低調に推移した。	県 4 港のまき網では 324.7 トンの水揚げで、前年比 56%、平年比 194%、北薩海域の棒受網では 307.6 トンの水揚げで、前年比 226%、平年比 399%であった。1 月以降、北薩海域で大羽カタクチ主体の水揚げが続いている。 【シラス】 西薩海域では、1,185.2 トンの水揚げで前年比 96%、平年比 163%、志布志海域では 252.9 トンで前年比 69%、平年比 95%であった。

注：「前年」は 2004 年 11 月～2005 年 1 月、「平年」は過去 5 年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは福岡県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。